

高校生 4 名を含む 12 名がジュニア世界選手権に挑戦した。この若い種が大きく育つのはこれからだ。

ジュニア世界選手権大会
リトアニア・ドゥルスキニンカイ市
2006 年 7 月 2-9 日

今年の JWOC に日本からは、高校生 4 名を含む男女各 6 名の代表選手と 2 名のオフィシャルの計 14 名が遠征し、34 ヶ国からの 300 名を超える選手を相手に戦った。ここでは各レースの経過および結果に関連トピックスと共に報告する。



開会式へのパレード（旗手は岡本）

トレーニングキャンプ&モデル

経験年数の少ない日本のジュニア選手にとって数多くの異なるタイプのトレインを経験することの意義は大きい。特に今年はスプリントが初めて正式種目に採用された年でもあって、国内の強化合宿でも 1 回分を費やして特化したトレーニングを行ってきたが、現地トレキャンでも重要事項として盛り込んだ。

初日のトレキャン後のミーティングでは、何が使えるとかというトレインへの感想を出し合ったが、それは以下

のようなものであった。

- ・緑の違いは枝が多いところがやぶ。
- ・ピーク、凹地はたどっているつもりでもずれてくるのでコンパスが重要。
- ・同じようなものが多すぎて地形の把握が困難。補助コンが多いと高く見えてしまう。
- ・切り通しは走れる。道に出てもリロケートできない。



トレキャンで林を走る松永

スプリント競技

スプリントの競技エリアの内、公園部分以外は直前まで立ち入り可能だったので、前日に全員で散策して回った。フィニッシュになりそうな場所や公園への入口を確認し、精神的にはかなり落ち着いた状態でレースを迎えることができたと思う。

実際は自分たちの泊まっているホテルや目の前の協会まで地図の中で、男子コースはそこを周回するというものだったのには驚いた。コースは前半が市街地、後半に公園部分という設定であったが、日本選手はその切り替えができず、後半の林の中に前半と同じ感じで飛び込んでタイムロスをした選手が多かった。その中で新妻選手は特に後半部分で先行選手の追走に成功し、タイムを上げた。スプリント競技で良い成績を出すためには絶対スピードが不可欠であり、今後の選手選考および強化の課題であるのは変わらない。

今回は観客が見ている場所に 2 m 位の幅の花壇があったのだが、これを飛び越えた選手が 4 名いたことがオフィシャルミーティングで指摘された。もちろん地図表記は ISSOM の通行禁止の色になっており、その切れ目も描いてあるわけだが、その中間あたりに出てきた選手が思わず飛び越えてしまったものだ。その場では失格云々の話にはならず、コーチの人たちには今後正しい指導をしてもらいたいという指摘だけに留まった。この花壇に遮られた日本選手もいたが正しく切れ目まで迂回していたので、当然といえば当然だが誉めて良いだろう。



スプリントコース内の宿泊ホテルと教会

スプリント競技

< 女子 >

			トップ比
1	H. I. Weltzien	10:46.2	100%
2	Hanny Allston	10:49.9	101%
3	Eva Svensson	11:24.7	106%
93	新妻 道	14:51.4	138%
105	畑岡祥子	16:05.3	149%
108	高野美晴	17:15.5	160%
109	阿部ゆかり	17:20.5	161%
112	関谷麻里絵	17:37.4	164%

116	松永真澄	19:30.3	181%
<男子>			
1	M. Kristensson	11:44.1	100%
2	P. Karisson	11:53.0	101%
3	R. Glebov	11:55.6	102%
124	千々岩瞳	14:45.4	126%
136	宇野夏樹	15:21.1	131%
138	崎田孝文	15:38.2	133%
141	岡本将志	15:44.1	134%
145	小見山斉彰	16:03.4	137%
147	伴 毅	16:10.3	138%



ホテルの前にそびえる教会

ロング競技

ロングは男子 12.5km、女子 8.6km で図に示すようなロングレグのある堂々たるコースである。今年は意図的に最初の強化合宿でこの距離を選手に経験させた。そのおかげか、選手たちに距離や時間に対する不安感は少なかったように思う。しかし日本には無い微地形でのロングレグなど、技術的な課題が選手たちを苦しめた。あっさり回り道をしてこなしした選手もいたがその分時間が掛かってしまった。そのために完走はしたものの2時間30分のタイムオーバーでdisqになった選手が続出した。



男子ロングでのロングレグ

ロング競技

<女子>				トップ比
1	Hanny Allston	0:53:57	100%	
2	B.A.B. Nilsen	0:58:35	109%	
3	E.A. Skantze	1:00:13	112%	
108	関谷麻里絵	2:04:44	231%	
110	松永真澄	2:07:24	236%	
112	阿部ゆかり	2:15:09	251%	
115	畑岡祥子	2:26:10	271%	
116	高野美晴	2:27:51	274%	
	新妻 道	disq		
<男子>				トップ比
1	A. Skarholt	1:10:41	100%	
2	O. Lundanes	1:13:21	104%	
3	M. Puusepp	1:16:57	109%	
138	岡本将志	2:20:23	199%	
142	伴 毅	2:26:22	207%	
	崎田孝文	disq		
	宇野夏樹	disq		
	小見山斉彰	disq		
	千々岩瞳	disq		

ミドル競技

ミドルは日本人選手にとって距離的にも最もイメージしやすく、目標の立てやすい競技種目である。実際にBファイナル進出を目標に設定していた選手も多かった。しかしトレキャンから始まってスプリント、ロングをこなし、1日の休養日はあったものの疲れが抜け切っていない選手も多かった。結果的には技術的な難しさも相まって男子はBファイナル進出ゼロ、全体の人数が少なかった女子もBファイナル進出は阿部、松永の2選手のみに留まった。

ミドル競技予選

<女子>				トップ比
1-	1	T. Kozlova	0:22:51	100%
1-20		A-final	0:29:02	127%
1-40		松永真澄	0:52:25	229%
1-40		B-final	0:52:25	229%
		高野美晴	disq	
2-	1	Saila Kinni	0:23:22	100%
2-20		A-final	0:27:15	117%
2-40		B-final	0:49:47	213%
2-41		関谷麻里絵	0:54:05	231%
		畑岡祥子	disq	
3-	1	A. Persson	0:21:07	100%
3-20		A-final	0:26:39	126%
3-38		阿部ゆかり	0:36:48	174%
3-40		B-final	0:57:14	271%
		新妻 道	disq	
<男子>				トップ比
1-	1	Alexei Zotov	0:21:14	100%
1-20		A-final	0:24:44	116%
1-40		B-final	0:30:49	145%
1-54		岡本将志	0:47:13	222%
1-56		崎田孝文	0:50:43	239%
2-	1	T. D. Mo	0:20:17	100%
2-20		A-final	0:23:39	117%
2-40		B-final	0:30:08	149%
2-49		伴 毅	0:36:27	180%
2-50		小見山斉彰	0:39:42	196%
3-	1	J. Fredriksson	0:20:26	100%
3-20		A-final	0:22:59	112%

3-40	B-final	0:27:49	136%
3-51	千々岩瞳	0:45:40	223%
3-53	宇野夏樹	0:49:02	240%

ミドル競技決勝

<女子>				トップ比
B-	1	K. D. Harrevile	0:24:54	100%
B-48		阿部ゆかり	0:46:31	187%
B-51		松永真澄	1:12:56	293%
C-	1	M. C. Bohm	0:29:30	100%
C-	3	関谷麻里絵	0:51:40	175%
C-	4	高野美晴	0:53:26	181%
C-	7	新妻 道	1:19:38	270%
		畑岡祥子	disq	
<男子>				トップ比
C-	1	E. Schiavio	0:22:58	100%
C-23		伴 毅	0:35:16	154%
C-32		小見山斉彰	0:42:29	185%
C-35		宇野夏樹	0:48:55	213%
C-36		千々岩瞳	0:50:04	218%
C-38		崎田孝文	0:52:12	227%
C-39		岡本将志	0:53:53	235%

リレー競技

リレーのチーム分けおよび走順は日本での最終合宿の時に選手も含めて相談し決定していた。現地の対応状況もまったくお手上げという選手はいなかったもので、そのまま予定通りのチームで戦った。

男女とも2走が帰ってくる前にウイニングランが行われるという結果だった。男子は第2チームが見事に第1チームを破り日本の記録となった。女子の第2チームははっきりしない放送でウムスタートを聞き逃し、遅れての単独スタートとなったが、最終ランナーの松永選手は、1番で大ミスをしたものの持ち前の粘り強さを発揮してしっかり完走し、全員の出迎えを受けた。



女子1走の関谷から2走の阿部へのタッチ

リレー競技

<女子>

1	ロシア	1:54:35	100%
2	スウェーデン	1:55:26	101%
3	フィンランド	1:55:37	101%
23	日本 A	3:32:26	185%
	A-1 関谷麻里絵	1:11:45	
	A-2 阿部ゆかり	1:08:04	
	A-3 高野美晴	1:12:37	
-	日本 B	DISQ	
	B-1 新妻 道	1:35:47	
	B-2 畑岡祥子	1:27:18	
	B-3 松永真澄	DISQ	

<男子>

1	エストニア	2:18:42	100%
2	スウェーデン	2:20:21	101%
3	ノルウェー	2:20:40	101%
31	日本 B	4:06:03	177%
	B-1 崎田孝文	1:15:00	
	B-2 小見山育彰	1:26:02	
	B-3 岡本将志	1:25:01	
-	日本 A	4:10:44	181%
	A-1 千々岩瞳	1:26:28	
	A-2 伴 毅	1:20:24	
	A-3 宇野夏樹	1:23:52	

その他

今年のJWOCは、環境的にはここ数年間で最も恵まれたものであった。バス・トイレ付きのツインルームには、机、テレビ、電話、冷蔵庫、LAN、バルコニーがあり、食事も3食ビュッフェスタイルで、メニューも豊富（全種類は食べ切れない）。最初の海外遠征

でこんな生活を経験してしまうと、ハングリーさがなくなってしまうのではと心配するくらいだった。

そのおかげか、レース中はちくちく草（しびれ草）に悩まされたり、山ダニに食われた選手こそいたが、今年は大きな怪我や風邪引きがなく、消炎系の外用薬以外はほとんど使わずに済んだ。

トレーニングキャンプの地図も、オーガナイザに頼んだところ事前にOCADファイルを提供してくれ、日本でサンプルコースを組んだりして活用することができた。現地の地図を勉強するためには、これは非常にありがたかった。

後日談になるが、今年のJWOCロングで優勝したオーストラリアのハニー・アルストン選手は、8月のデンマークでの世界選手権のスプリント競技で、世界の女王シモーネ・ニグりを破って優勝してしまった。若手の可能性とスプリントの可能性を見た思いである。

今年は日本チームも高校生が4名と若く、当初はチーム内のまとまりへの心配もあったが、テンションの高い女子選手に引っ張られておとなしい男子選手も次第に打ち解け、仲良く遠征を楽しめたようで何よりであった。今年は成績を期待するというより種まきの年であったが、今後この若い種が各所

で花を咲かせてくれることを期待したい。

来年のJWOCはオーストラリアで開催される。南半球なので、初めて涼しい（寒い）場所でのJWOCとなる。スプリントは非常に面白い場所（動物園）でのレースだと紹介されている。併設大会も期待できそうなので、選手以外の多くの人にも是非参加して応援してもらいたい。

（尾上秀雄）

